

目次

第 1 章 「日本語学習と人生のつながり」という問題設定.....	1
1-1 教育再考における日本語専攻学生の視点の欠如.....	2
1-2 外国語として日本語という「ことば」を学ぶということ.....	4
1-2-1 使うあてのない外国語学習.....	4
1-2-2 言語的道具としての「ことば」の学習.....	10
1-3 「ことば」を学ぶということ.....	14
1-3-1 「生きる活動」という視点.....	14
1-3-2 「移動性」という視点.....	18
1-4 「日本語学習と人生のつながり」の探究.....	21
1-4-1 本書の枠組み.....	21
1-4-2 本書の問題意識と質的研究法の関係.....	25
1-4-3 フランスの日本語教育における調査・研究.....	29
1-5 本書の目的.....	33
1-6 本書の構成.....	34
第 2 章 「学習と人生のつながり」はどのように捉えられてきたか..	39
2-1 学習と人生のつながり.....	41
2-1-1 生涯教育論における学習.....	41
2-1-2 成人教育学における学習.....	45
2-1-3 大学・高等教育学における学習.....	49
2-1-4 社会文化的アプローチに基づく学習.....	55
2-2 外国語学習と人生のつながり.....	64
2-2-1 母語話者をめざす外国語学習.....	65
2-2-2 複言語話者をめざす外国語学習.....	69
2-3 本書の位置づけ.....	74
2-3-1 本書における「学習と人生のつながり」の定義.....	74

2-3-2	日本語教育における「学習と人生のつながり」論の意義...	77
第3章	日本語専攻学生が置かれている日本語学習環境	83
3-1	「日本」への関心とフランスの大学教育政策からみる 日本語学習の開始	83
3-2	フランスの大学の「大衆化」からみる日本語学習の継続	87
3-3	フランスの言語教育政策における理念と日本語教育実践	90
第4章	人生と日本語授業—日本語ポートフォリオ実践研究—	95
4-1	本章の位置づけ	95
4-2	ポートフォリオに関する先行研究	96
4-2-1	ポートフォリオの定義	96
4-2-2	日本語教育におけるポートフォリオの運用	96
4-2-3	本論におけるポートフォリオ	99
4-3	日本語ポートフォリオ作成活動	100
4-3-1	概要	100
4-3-2	教師の役割	101
4-3-3	記述項目	102
4-4	日本語ポートフォリオの記述の分析	103
4-4-1	分析の問い	103
4-4-2	分析の方法	103
4-5	分析結果	105
4-5-1	日本語授業の位置づけ (ストーリーライン)	105
4-5-2	「日本語授業の位置づけ」に関するまとめ	109
4-5-3	日本語学習と人生のつながり (ストーリーライン)	112
4-5-4	「日本語学習と人生のつながり」に関するまとめ	116
4-6	小括：研究課題の再設定	118

第5章 生活と日本語学習—在籍生へのインタビュー調査—	121
5-1 本章の位置づけ	121
5-2 分析の問い	121
5-3 分析資料	122
5-4 調査協力者	122
5-5 分析手順	125
5-6 事例1：マキシムの日本語学習と人生がつながるプロセス	126
5-6-1 マキシムの日本語学習に関わる経歴	126
5-6-2 マキシムの日本語学習に関わるカテゴリー、 サブカテゴリー、構成概念	128
5-6-3 垂直的視点（時間）のつながり	130
5-6-4 水平的視点（空間）のつながり	134
5-7 事例2：ジュリアンの日本語学習と人生がつながるプロセス	141
5-7-1 ジュリアンの日本語学習に関わる経歴	141
5-7-2 ジュリアンの日本語学習に関わるカテゴリー、 サブカテゴリー、構成概念	143
5-7-3 垂直的視点（時間）のつながり	146
5-7-4 水平的視点（空間）のつながり	153
5-7-5 ジュリアンの「移動」	163
5-8 事例3：エロディの日本語学習と人生がつながるプロセス	165
5-8-1 エロディの日本語学習に関わる経歴	165
5-8-2 エロディの日本語学習に関わるカテゴリー、 サブカテゴリー、構成概念	167
5-8-3 垂直的視点（時間）のつながり	169
5-8-4 水平的視点（空間）のつながり	176
5-8-5 エロディの「移動」	183
5-9 小括：「日本語学習と人生のつながりの軸」の形成	185

第6章 「移動」と日本語学習—修了生・中退及び転科者への 質問紙・インタビュー調査—	189
6-1 本章の位置づけ	189
6-2 分析の問い	189
6-3 分析資料	190
6-4 調査協力者	191
6-5 分析手順	196
6-6 事例1：シシルの日本語学習と人生がつながるプロセス	198
6-6-1 シシルの日本語学習に関わる経歴	198
6-6-2 大学時代の学習・生活経験（ストーリーライン1）	198
6-6-3 大学時代の学習・生活経験と現在の「生活」との つながり（ストーリーライン2）	201
6-6-4 大学という学習環境における日本語学習のあり方 （ストーリーライン3）	203
6-6-5 シシルの「移動」	204
6-6-6 シシルの「移動」の経験、及び「移動」の意味づけ	206
6-7 事例2：ギヨムの日本語学習と人生がつながるプロセス	207
6-7-1 ギヨムの日本語学習に関わる経歴	207
6-7-2 大学時代の学習・生活経験（ストーリーライン1）	208
6-7-3 大学時代の学習・生活経験と現在の「生活」との つながり（ストーリーライン2）	214
6-7-4 大学という学習環境における日本語学習のあり方 （ストーリーライン3）	217
6-7-5 ギヨムの「移動」	225
6-7-6 ギヨムの「移動」の経験、及び「移動」の意味づけ	227
6-8 事例3：サラの日本語学習と人生がつながるプロセス	228
6-8-1 サラの日本語学習に関わる経歴	228
6-8-2 大学時代の学習・生活経験（ストーリーライン1）	229

6-8-3	大学時代の学習・生活経験と現在の「生活」との つながり (ストーリーライン 2).....	232
6-8-4	大学という学習環境における日本語学習のあり方 (ストーリーライン 3).....	235
6-8-5	サラの「移動」.....	237
6-8-6	サラの「移動」の経験, 及び「移動」の意味づけ.....	239
6-9	小括: 大学時代及び大学という学習環境における 「移動とことば」の関係性.....	241

第 7 章 総合考察: 「学習と人生のつながり」から捉える

	日本語学習の実態.....	247
7-1	本研究による知見のまとめ—日本語専攻学生の「日本語学習と 人生のつながり」—.....	248
7-1-1	[研究 1] 人生と日本語授業.....	248
7-1-2	[研究 2] 生活と日本語学習.....	251
7-1-3	[研究 3] 「移動」と日本語学習.....	254
7-2	「学習と人生のつながり」からみる日本語専攻学生の学び.....	256
7-2-1	日本語学習経験を意味づける「学習と人生のつながり の軸」.....	257
7-2-2	社会的文脈と学習目的の相違から形成される将来像・ 学習目的.....	262
7-2-3	学習実態からみる「日本語専攻学生の日本語学習を 阻む要因」.....	266
7-3	日本語専攻学生が「外国語としての日本語」を学ぶ意義.....	270
7-3-1	「使うあてのない外国語学習」がもたらす 複線の視点への変移.....	270
7-3-2	「ことば」の学びによる空間的な「移動」の拡がり.....	275

第 8 章 「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化を めざした外国語教育に向けて	281
8-1 日本語専攻学生の「ことば」の学びに寄り添う日本語教育	281
8-2 「外国語としての日本語」教育の到達目標の変容	283
8-3 「使うあてのない外国語」の学習・教育への展開	286
8-4 「外国語としての日本語」教育／第二外国語教育における 本書の位置づけ	292
8-5 「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした 日本語教育実践の構想	295
8-6 今後の課題と展望	302
初出一覧	305
あとがき	307
引用文献	312
資料	325

第1章

「日本語学習と人生のつながり」 という問題設定

本書の目的は、日本語学習が将来において「使うあてのない外国語学習」となる可能性が高い状況にいる日本語専攻学生に対する「学習と人生のつながりの軸」の形成と意識化をめざした日本語教育を提言することにある。本書では、フランスの国立大学で主専攻として日本語を選択した学生（在籍生、修了生・中退及び転科者）の移動性¹に注目し、日本語専攻学生が、どのように日本語学習体験及び日本語学習に関わる多様な学習体験を連携させ、「日本語学習と人生のつながり」を構成しているかを明らかにする。その結果を踏まえ、大学時代及び大学という学習環境において、「外国語としての日本語」を主専攻として学ぶ意義を考察し、日本語専攻学生の「ことば」の学びに寄り添う日本語教育とはどのような教育かを明らかにする。

本章では、まず、本書の問題意識と視点を詳述する。次に、本書の枠組み及び研究法を述べるとともに、フランスの日本語教育を対象とする調査・研究から本書の意義を示す。そして、本書の目的及び構成を説明する。

1 本論では、「移動」が個人の時間的な推移と空間的な動きを表す概念に対して、「移動」する存在である個々人がもつ特質を「移動性」ということばで表し着目する。詳しくは、1-3-2で詳述する。

第2章

「学習と人生のつながり」は どのように捉えられてきたか

学習と人生は切り離して考えることはできない。人は生涯をかけて、一生学び続ける。このような「学習と学ぶ者の人生とがつながっている」という考え方は、古来より儒教思想のなかで示されてきた。孔子（B.C.552-479）による『論語』においては、自らの一生を回顧し、人を形成するための学には終わりが無いことを諭す、次のような一説がある。「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順がう。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」（孔子、1999、p.35）。また、宗教思想においても説かれてきた。例えば、仏教思想における芸武道の修行観を示した世阿弥（1363-1443）による『風姿花伝・花鏡』においても、生涯を通し試練が存在し、学びの心を忘れてはいけないということについて、生涯忘れるべきではない苦節した若い頃の初心（「ぜひ初心忘るべからず」）、歳を重ねるとともに積み得ていく折々の初心（「時々初心忘るべからず」）、そして、新たな試練に立ち向かわざるを得ない老年の初心（老後の初心忘るべからず）という三つの「初心」を通して説かれている（世阿弥、2012）。キリスト教思想における生命観を示すコメニウス（1592-1670）による『大教授学』においても、「人間が生まれた時から負わされている注文」として、「あらゆる事

第3章

日本語専攻学生が置かれている 日本語学習環境

3-1 「日本」への関心とフランスの大学教育政策からみる日本語学習の開始

現在、海外の日本語教育を行っている142ヶ国の教育機関に所属する日本語学習者は、1979年度以降、継続的かつ大幅に拡大している状況にあり、2018年度の学習者数をみると、約20年前の2009年度調査から5.5%増の3,851,774名と20万以上増加している（独立行政法人国際交流基金、2011；2020）。同様に、西欧地域の日本語教育においても、近年、日本の文化コンテンツ、特にポップカルチャーに関するコンテンツへの関心の高まりに応じ、学習者数が増加する傾向にある。西欧諸国のなかでもフランスは日本語学習者数が最も多い。2018年度には、全学習者数90,114名のうちの約27%（24,150名）をフランスの学習者が占め、そのうちの約半数にあたる12,321名（日本語専攻が5,548名、日本語専攻以外が6,633名、課外活動が140名）が、大学で日本語を学習している（図3-1参照）。

第4章

人生と日本語授業

—日本語ポートフォリオ実践研究—

4-1 本章の位置づけ

本章では、日本語ポートフォリオの実践研究を通して得られたポートフォリオの記述内容より、日本語専攻学生（在籍生）が、大学の日本語授業をどのように位置づけているか、また大学での日本語学習と人生をどのように関わらせているかを考察する。フランスの国立大学日本学科においては、在学期間に、日本語専攻学生が「日本語学習と人生のつながり」を省察する機会は皆無に等しい。筆者は、何のために日本語を主専攻とし選択し、学習したのか、また、身につけた日本語を将来、どのように活かしていくかを、学生自身が省察する機会を十分にもっていないことが、進級率の低さ、日本語学習の放棄、在学中の日本語学習と卒業後の職業の分断の要因であると考え、一人ひとりの学生が、「日本語学習と人生のつながり」を省察しながら学習に取り組めるようになることを目的とする日本語ポートフォリオ（以下、ポートフォリオ）作成活動を実施した。

第5章

生活と日本語学習

—在籍生へのインタビュー調査—

5-1 本章の位置づけ

本章では、日本語専攻学生（在籍生）を数年間追ひ、在籍生の「生活と日本語学習」、つまり、一人ひとりの学生が、生活のなかで、どのように日本語学習体験、及び日本語学習に関わる多様な学習体験を連繋させ、どのように日本語学習と人生のつながりをつくり出しているのかを記述することを試みる。具体的には、フランスの国立大学の学士課程日本学科において、筆者が担当した日本語科目を受講する在籍生3名を対象にインタビューを行った。そのインタビューにより得られた語りをもとに、垂直的視点（時間）及び水平的視点（空間）からみた移動性という観点で、日本語学習、日本語使用、日本語以外の学習の体験プロセス、それらの体験の意味づけ、体験間のつながりを描く。その上で、「日本語学習と人生のつながり」のプロセスを考察する。

5-2 分析の問い

本章では、フランスの国立大学の学士課程日本学科で、主専攻として日

第6章

「移動」と日本語学習

—修了生・中退及び転科者への質問紙・インタビュー調査—

6-1 本章の位置づけ

本章では、日本語学習に関わる移動性をより詳細に記述するため、日本語専攻学生の範囲を修了生・中退及び転科者に広げ、「移動」と日本語学習に関する調査を行う。具体的には、修了生・中退及び転科者3名に対する質問紙調査及びインタビュー調査を通して、垂直的視点（時間）及び水平的視点（空間）から、日本語学習に関わる「移動」の軌跡を追う。さらに、どのような変容のプロセスを経て、それら二つの視点における「移動」が統合されているのかを追究する。そして、大学時代及び大学という学習環境における「移動とことば」の関係性を考察する。

6-2 分析の問い

本章では、過去にフランスの国立大学日本学科に在籍していた修了生・中退及び転科者への質問紙及びインタビューを質的に分析することにより、次の三点を明らかにする。

- (a) 大学時代の学習・生活をどのように経験していたか。
- (b) 大学時代の学習・生活経験と現在の「生活」にどのようなつながり

第7章

総合考察：

「学習と人生のつながり」から 捉える日本語学習の実態

本書では、日本語専攻学生の移動性に注目し、「モバイル・ライブズ」を形成し、そのなかに生きる日本語専攻学生の「日本語学習と人生のつながり」を垂直的視点（時間）及び水平的視点（空間）という両視点により記述しつつ、論を進めてきた。本書では、第1章において、次の三つの問いを立てた。

- I. 日本語専攻学生（在籍生、修了生・中退及び転科者）の大学での日本語学習経験は、どのように個々人の人生とつながっているのか。
- II. 日本語専攻学生（在籍生、修了生・中退及び転科者）は、フランスの国立大学の学習環境において、どのように日本語を学んでいるのか。
- III. 日本語専攻学生（在籍生、修了生・中退及び転科者）が、大学時代及び大学という学習環境で、「外国語としての日本語」を学ぶ意義とは何か。